

堺愛を子どもの心に

～出会い・つながりを大切にすること・郷土を誇りに思うこと～

堺市立西陶器小学校 教諭 彦 阪 聖 子

1. はじめに

生まれた町、育った町に愛着や誇りを感じて生きる人は優しい。心の中に帰ることのできる居場所がある人は強い。

学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」第2節 内容項目指導の観点 Cの17の「伝統と文化の尊重 国や郷土を愛する態度

冒頭に～自分が生まれ育った郷土は、その後の人生を送る上で心のよりどころとなるなど大きな役割を果たすものである。また郷土は、生きる上での大きな精神的な支えとなるものである～とある。

郷土に愛着が湧き、ここに生まれて良かったと思える子どもに育てるにはどうすればいいのだろうか。

吉田松陰の言葉に「国は人を以て盛んなり」とある。すべては「人」で決まる、という意である。郷土の良さを感じられるのは、そこに生きた人の素晴らしさを知ることから始まるのではないか。

そこで私は、卒業を控え新しい世界へと羽ばたく節目の希望を抱く年6年生に、郷土が生んだ偉人の生き方から学ぶ総合単元的な学習を体験学習の時間を軸にデザインした。人として憧れを抱き、その人に縁ある町に生まれた自分を見つめることを通して、「堺愛」を育みたいと願っての実践である。



2. 学習の実際

まず、大切なことは、ゴールを見据えたねらいに関わる学習場面を把握し、計画的に構想を練ることである。体験的な学習とリンクさせることも実感を伴って子どもたちの心に深く響くことであろう。そこで以下のような構想図を作成した。

総合単元名

＜人の生き方から学ぶ～子どもの心に「堺愛」を～＞

	学習活動
一学期	1 「先生の『堺愛』を知る」(総合)7/13
二学期	「安土桃山江戸時代の三人の武将」(社会) ↓ 2 「千利休の生き方から学ぶ」(総合)9/10 ↓ ① 校外学習「茶の湯体験」(於 大仙公園)9/12 「日清・日露戦争」(社会) ↓ 3 「与謝野晶子の生き方から学ぶ」(総合)11/1
	② 「中央子どもまつり」にて全校へ 総合での学びの発信(10ブースに分かれて) <テーマ> 「人の生き方から私たちが学んだこと」1/24
	4 「車いすダンスの方々をお迎えして」(総合)2/7 5 「安西冬衛の一行詩から学ぶ」(国語)3/9
三学期	

① 教師自身が『堺愛』を語り、願いを伝える。

私自身も、堺で生まれ堺で育ち、そして地元堺で教師になった。子どもたちにとって身近な大人、担任である私の生き方を語ることは、子どもたちにとって興味深いものであるようだ。

私は中学校3年の夏に、堺青

年会議所主催の「青年の翼」派遣団の一員として観光大使となり、姉妹都市の鹿児島県種子島、西之表市にホームステイをするチャンスに恵まれた。種子島での交流に向けて、堺を語れるようにと事前に利休ゆかりの南宗寺にて合宿を行った。そこで初めて知った堺の町の魅力、かつて「東洋のベニス」と栄え、かの信長にも愛された自治都市であったことに感動したことを子



どもたちに話をした。鉄砲が縁で姉妹都市となっている種子島でのホームステイ体験では、他人が家族として迎え入れてくれた幸せを語った。それが「人が好き!」の原風景となり教師という「人育て」の道を選んだ理由となったこと、そして、「他人から愛された記憶は人を強くしてくれる」こと、当時お世話になったご家族の池村さんとはその後もつながりを保ち、それが出会いを大切にすることの一つだと伝えた。

子どもたちは真剣に話を聴き、次のような感想を語った。

- ・彦阪先生みたいな出会いがしたいな。堺も種子島もいいところいっぱい。なんかいいな。今日の授業で6の1のみんなと出会えたこともよかった〜って思いました。
- ・今、先生の話聴いて先生とも絆が深まったし、ふるさとについて考えてみたくなりました。
- ・人との出会いが人生を変える、出会うことで成長していくんだと思いました。堺についてもっと知りたくなりました。

単元学習の入り口として、この授業は子どもたちにとって次へつながる貴重な学びの時間となった。

②～堺が生んだ茶聖～千利休の生き方から学ぶ。

堺市は平成18年度から「堺スタンダード茶の湯体験事業」を実施している。自国の伝統文化を知るとともに、茶道において大切にされている「もてなしの心」や人との関わり方を学び豊かな心を育むことをねらいとして「茶の湯」を6年生に体験させている。

これを、ただ体験するに終わるのでなく、社会科の戦国時代の学習の時期と重ね、歴史背景を学び、かつ千利休の人生を知るこの学びをリンクさせてから臨ませると、利休の「茶聖」と言われる所以、茶室の中は小宇宙、人間の身分に上下なしと説いた潔さ、なかでも、「利休七則」の意味に感動した子どもたちはそれを一生懸命覚えて校外学習に挑もうとした。

この授業から2日後の校外学習先の日本庭園の茶室では、誇らしげに千家の先生方の前でクラスみんなが利休七則を唱え、「初めてですよ、素晴らしい!」とほめられ満足げだった子どもたちの姿が忘れられない。

- ・当日は、利休が大事にした侘茶の心を心にお茶を飲もうと思う。今日、この利休の授業があってよかった。
- ・利休のことをよく知れた。侘茶を愛し身分関係な

く、人思いでみんなから愛されていたんだと思う。僕もそんな人になりたい。
・「死んでも愛す」とはこういうことだと思いました。茶の湯体験が楽しみです。

④〈茶の湯体験後の感想〉

- ・千利休と同じことをしていると思うとうれしくなりました。体験をして、侘茶の素晴らしさや大切さを知れました。そして、利休の人生がいっそうすごいと感じました。
- ・事前に調べたり勉強したりしてから行くと学びが深まるとわかりました。利休が堺に生まれて茶の湯の歴史を残してくれて今、こうしてお茶を飲むことができて良かった。



3. 与謝野晶子の生き方から学ぶ。

これは、一年で一番多くの保護者が教室を訪れてくれる日曜参観の日を選んだ。堺の先人について親子で考え、家庭でも話題にさせていただけることをねらった実践である。奇しくもこの日は〈古典の日〉でもあった。記念日や誕生日、命日などを選んで授業をするのもインパクトのある実践となるようだ。

授業の導入に、堺に縁のある先人、有名人の写真クイズに親子でチャレンジしてもらい、最後に晶子を紹介した。また晶子の人生をパワーポイントでまとめたものを提示しながら年表を作り、写真や資料と共に晶子の、母として、女性としての生き方を知らせ、明治大正昭和を生き抜いた情熱の歌人として、また弟思いの姉として、最も大切なものは心の真実をつたえること、そして「愛」だと信じた生き方を追った。

授業の終わりに晶子の写真に続き、茶の湯体験の時のクラス集合写真をテレビに映し、「君たちも同じ堺出身者だよ。」と余韻を残して終えた。



- ・私も晶子のように、自分の意見を言える強い大人になりたい。
- ・どんなに苦しいことがあっても、乗り越えていった晶子を尊敬します。
- ・いつも晶子のように本当の心を持つとうと思った。
- ・私も「晶子」。同じ名前の晶子さんよりすごい生き方、正しいことをしていきたいです。

⑧中央子どもまつりにて、学びの発信。

本校では三学期に全学年・学級が、生活科や総合的な学習の時間に学んだことをまとめ、表現方法を工夫して全校に発信する「中央子どもまつり」を児童会行事として行っている。六年生は内容も発信方法も下学年の手本となろうと力が入る。今回は、子どもからの提案で、学年目標「男女混合・心は一つ・信頼される道標・輝き誇れる最高学年」が叶うよう、学級の枠を超えて学年で10のブース作りをする運びとなった。

千利休紹介ブースでは、「利休七則」をパワーポイントで示して一つずつその意味を紹介し、「手作り七則かるた」を作って楽しんでもらう工夫が低学年の子どもたちに好評だった。

与謝野晶子紹介ブースでは、晶子の人生を写真や映像で伝え、晶子の短歌



や、晶子の残した言葉は短冊に穴あきで書いて示し興味を引いた。どのブースも伝えたいことを一人一人がよく自覚できており、自信を持って話しているのが印象的であった。



4. 車いすダンス日本代表選手ジェネシスの方々をお迎えして。

ここでは、今、出会うことのできる堺出身の先輩としてジェネシスの方をお迎えし、より身近に目標とできる方から、「生きる」とはどういうことなのかを感じさせていた。先人の歴史から学ぶだけではないリアルな出

会い。実際に車いすダンスを体験もさせてもらった。体験後、本音で語ってくださった自身の「挫折と夢」。



卒業を意識し始める2月に、希望につながる「自分次第」「人間ってすごい」というお話をうかがえた幸せを子どもたちも本音でつづったり発表したりした。

- ・一番心に残ったのは本当の友達を作っていくこと。誰もが味方しなくても、最後に残った一人が本当の友達なんだ。
- ・「世界が変わらないなら自分が変わればいい」ということ「できることからしていけばいい」と、「周りがその人を変えていける」ことも知れた。
- ・今僕の一番大切なことを教えてもらった。自分ももっと変わる!と勇気づけられた。
- ・1転べば1起きる・10転べば10起きる・100転べば100起きる、自分もこのように生きていければいいと思った。

5. 堺の先人から学ぶ～1つの詩を通して～

卒業まであと5日という日に、この授業を行ったのは、この安西冬衛の1行詩「てふてふが一匹 韃靼海峡を渡って行った」が新しい世界へ羽ばたく春を描いたのであったからである。安西氏は堺市立英彰小学校を卒業し、22歳で大連へ渡った。しかし

寒さに因る関節炎をこじらせ右足を切断された。そのころ書かれた1行詩が「春」である。



帰国後は堺市役所に勤務され多くの堺の小中学校歌を作詞していることでも有名である。私の中学校校歌も彼の作詞であり、歌って紹介をした。冬衛の代表作である詩「春」を、授業ではポイントを「題名を考えよう」に置き展開した。子どもたちは、この題を「つながり・夢・時間・勇気・希望・心・道・…」と、そう考える理由を大切に発表交流し感心し合っていた。実は「春」だと知ったとき「なるほど!」と感動が広がった。

- ・ぼくは1年前の春を思い出した。あれから1年たつてまた春がくると思うと少し寂しくなった。ぼくは卒業前のこの時期にこの授業があってよかったです。安西さんは自分で新しい希望をつくっている。ぼくもそんな人になりたいです。
- ・これから大人になっていくにつれ新たなスタートがたくさんある。「春」の詩の蝶のように力強く勇気をもって歩いていこうと思った。
- ・安西さんの詩から祖国日本に対する気持ちがすごく伝わった。悲しい時代ではあるがこの時代が安西さんを生み出し後世に名を残しているんだと思う。世界にはもっと偉人がいて、今もたくさん生まれているんだと感じた。
- ・ずっとまだまだ小学校で先生たちと勉強したい。けど、この蝶が向かっていったようにぼくも勇気を出して巣立ちたい。



毎日発行したその日の学びを伝える学級通信「奇・軌跡」

最後に、「堺愛」「出会い・つながりへの希望」を書いた子どもの感想を紹介したい。

6. 終わりに

この取り組みは、堺市において進められている、子どもたちが「堺を知り、堺を学ぶ」「子ども堺学」のねらいにも叶ったものである。

本実践では、子どもたちの実感を伴って心に響く「深まり」を大切にしたい。

各教科、特別活動の固有のねらいを大事にしながら、それぞれの学習や体験活動の中で子どもがどんな意識になるのかをはっきり想定しておき、どの時期にどう他教科をリンクさせると効果的なのか見通しをもって取り組むことが「深まる」ことにつながった。

また、子どもたちに育みたい心を教師がぶれずに描いておくことで、すべての教育活動で意識して子どもに寄り添うことができた。学習の時期をタイムリーにデザインすることも子どものその時々的心境により響く結果となった。

今回のように、学んだことをアウトプットできる発信の場を用意することも大切である。伝えること、教えることは、「繰り返し学ぶ」ことにつながり、より子ども自身の学びが確かなものになっていった。

総合的横断的に学習を行うことにより、子どもたちの自主自律的な学習態度も育てることもできた。友だちと図書館に行って調べをしたり家庭学習として休日に堺の先人調べをして新聞にまとめたり、「学んでから体験すると、よくわかりより楽しめた」という意見にクラス全体が頷いたこともうれしい成果となった。

